

2022年7月10日(日) ショートメッセージ「かなめ石はキリスト」

郷 健人

暗唱聖句: 実に、キリストはわたしたちの平和であります。(エフェソ 2:14)

前回のショートメッセージでもふれられた通り、エフェソ書のテーマは「公同教会」です。私たちが通う“常盤台バプテスト教会“のような「地域教会（各個教会）」ではなく、救われた者すべてを包み込む、普遍的な目に見えない教会が「公同教会」です。個人的にはあまり深く意識したことはありませんでしたが、大きな大きな公同教会があり、その一部分として常盤台教会があり、さらにその一部分として自分がある、と考えると、世界中の神の家族との繋がりが感じられ、心が沸き立つようにも思います。当然ながら、生まれた国だとか、人種だとかで区別、排除しては普遍的な教会とは言えません。「わたしたちの本国は天にある（7/9の聖書日課、フィリピ3:20）」との御言葉が示すように、誰もが神さまの被造物であり、等しく恵みを受ける者ですから、人間の目から見た違いは乗り越えなければなりません。この、人間の知恵や理性では本来困難な「1つとなる」ということを、叶えてくださるのがイエスさまなのです。

本日の箇所、2章14節に書かれた「2つのもの」とは、ユダヤ人と異邦人を指します。当時は、信徒の指導的な立場の人たちでも、異邦人にも救いは及んでいるのかと議論していたような時代です。また、「良きサマリア人のたとえ」などにも示されるように、民族間の対立もありました。イエスさまは、律法を「守ること」自体が信仰表明であり、仲間同士の“しるし”のようになっていた中であって、真に大切なことは何かを教えてくださいました。イエスさまに従い、律法そのものではなく、律法も含めてこの世のすべてを造られた神さまを見上げる時、私たちは1つとなるのです。

「実に、キリストは私たちの平和であります」確信に満ちた、この美しい日本語は、思わず何度も口に出して言いたくなります。世界の惨状を見る時に、イエスさまを信じれば敵意が滅ぼされ、平和に至るなどと考えるのは、救いに与っていない人から見れば何とも能天気に見えるかもしれません。またその結果、私たちが福音を告げ広めることに躊躇いを覚え、何か社会に対してもっと直接的な影響力があることをしたくなかったとしても、不思議ではありません。しかし、世界中の人々がそのような考え始めたら、あっという間に福音の灯は消え去るでしょう。困難な時こそ、私たちは与えられた場所で御言葉を語り続け、人々をイエスさまへと導くことにこそ、全力を尽くしたいと願います。

2章16節に「十字架において・・・」「十字架によって・・・」と書かれていることは、大変重要であると考えます。イエスさまによって1つとされる上で、十字架を切り離すことはできません。十字架による贖いは他ならぬ自分のためであったこと、そしてイエスさまが死に打ち勝ち復活されたこと。これらの信仰がなければ、極端な話、イエスさまは何やら有難い教えを人々に伝えた、「歴史上の偉人」の1人になってしまいます。人々をイエスさまへと導こうとする時、十字架や復活に触れることには一定のハードルがあるかもしれません。しかし、それに臆することなく、相手にとって最適なタイミングと言葉が示されるよう祈りつつ、イエスさまの全てを余すことなく伝えていくのが、私たちの使命です。大それたことに聞こえるかもしれませんが、「**イエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい**」（7/8の聖書日課、ペトロII3:18）とあるように、イエスさまご自身が私たちを変えてくださるので、心配は要りません。

2章20節では、イエスさまをかなめ石として私たちが組み合わされ、建物（神殿）がつくりあげられる、と語られています。私たちが1つの体としてたとえる時、手や足に役割がわかるように、建物を作り上げる上でも扉の人、柱の人、床の人・・・と、それぞれが果たす働きは異なるのでしょう。

「まぜる」という言葉を漢字にする場合、「混ぜる」と「交ぜる」の2種類があります。「混ぜる」と書くときは、「絵の具で青と黄色を混ぜる」のように、複数のものが1つに溶け合わさり、別のものになることを指します。混ぜて緑色となった絵の具を、再び青と黄色に分けることは不可能です。

一方、「交ぜる」と書く場合は、「大人と子どもが交ざっている」のように、また元通りに分けることが可能で、1つになっている状態でも個々の区別がつかます。

私たちの信仰生活、教会での歩みとは、まさに神さまによって集められ、1つの群れとして「まぜあわされた」ものです。これに漢字を当てはめるなら、信仰を持たず、距離を置いて見た場合は「混ぜる」の方でしょう。自分と言う人間が失われ、みんな同じカラーに統一された集団、に見えかねない、ということです。しかし実体は「交ぜる」の方で、もちろん最も大きな部分、最も根本的な部分においては一致しているものの、そこから先は極めて多種多様。様々な違いを持った者同士が集まっています。それは地域教会というスケールでも、共同教会というスケールでも同じでしょう。

「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」（7/7の聖書日課、ヨハネ13:35）

イエスさまを中心に、互いの違いを愛し合い、1つとなって主に仕える。言葉にすればシンプルですが、これが教会の目的そのものであり、真にそれを実現するならば、難しいことはせずとも福音は伝わっていくのです。

コロナ禍で私たちは物理的に離れましたが、その間もあらゆる奉仕が捧げられ、その時々でできる最大限の礼拝や、学び、交わりが成されてきました。そしてこの間も、多くの受浸者、転入者が主によって与えられました。このことは、板橋区常盤台2-3-3にある建物が「常盤台バプテスト教会」なのではなく、私たちの主にある繋がりこそが「常盤台バプテスト教会」を作り上げているのだと、雄弁に物語っています。コロナ禍を通して、一人ひとりが少しずつ変化、パワーアップした中で、それらがどのように交ぜあわされ、新しい教会を作り上げていくのか、そこでどのように主の働きが成されていくのか、期待せずにはられません。

～讃美歌「We are one」より～

一人ひとりが 一人ひとりらしく 神さまによってつくられた

ひがしにし
東西から 北も南までも 世界の果てまで 愛を届けよう！

We are one We are one キリストの愛で

We are one We are one 一つの家族

悲しみも にくしみも 乗り越え一つとなる

国籍も 年齢も 乗り越え一つとなる

We are one We are one キリストの愛で

We are one We are one 一つの家族 神の家族



ショートメッセージは、教会ホームページから動画でも視聴できます。

右のQRコードを読み込むか、スマホ・PCからご覧の方は[こちら](#)をクリックしてください。

公開：7月7日（木）～